

第一部

基調講演「現代人と母性」

国際日本文化研究センター所長 河合 隼雄

人間の歴史を超える母の歴史

甲南大学のこの共同研究プロジェクトは、文科系としては初めて文部省の学術フロンティア推進事業に採択されたという点で、まさに「フロンティア」のフロンティアという感じがします。そこで「母性」がテーマに採り上げられたのは、本当に現代の状況をすくよくよく反映していると思います。

母性というものは、考えてみると、人間の歴史のなかで一番古いものといっていいかもしれません。非常に古い歴史をもっている。ところが今、どうしてもこのことを考えたいという問題として、母性が出てきているところが、現代の特徴ではないかと思えます。だからなかなか話をするのが難しい。「現代人と母性」という題は、ずいぶん前にお聞きして、それからずっと考えていたんですが、ここに立つまで考えていてまだわからないようなところがあります。立つ寸前に考えをまとめていたんですけども、どこへ話がいくかわからないくらい難しい。

母性というものは、あんまり考えないとあっさりしたもの

でわかりきったことなんです。が、「現代人」とついてきますと現代の人は考えるのが好きといえますか、どうしても考えてしまつ。言葉で表現するということが入ってくるわけですが、考え始めると非常にわかりにくいと思います。

人間が考え始めない昔というか、もともと初めの頃は、母性は人間にとつて最高、最大のものだったろうと私は思っています。つまり、お母さんがいなくなったら人類はすぐ滅亡するわけですから、これは非常にはつきりしてますね。その頃はおそらく、お父さんの役割をわかつていなかったんじゃないかと思ってるんです。

おそらくお母さんが子どもを産むというのは、はつきりしているわけですね。子どもを産まないとしても人類は続いていかない。だから「母が子どもを産むのだ」ということは絶対大事ですね。その意味で言いますと、動物の社会に「お母さん」というのはありますが、「お父さん」というのはありませんね。猿は自分を産んでくれ



たお母さんのことをずいぶん覚えています。もちろんお母さんに抱きついていますが、離れてからでも自分のお母さんがある程度知っていて、お母さんが死ぬと子どもが絶食して死んでしまおうとかそんな例も報告されています。だから母と子の一体感というのはずいぶんものですね。

猿は自分のお母さんは知っているわけですが、でも、猿に「あなたのお父さん誰？」と聞いて知っている奴は絶対いないと思いますよ（笑）。「そもそもお父さんって何ですか？」と必ず聞くと思います。「ボス」というのは知っていますね。ボスはいるんですが、お父さんというのとはわからない。そういう意味でいうと、「父」というのは人間が発明したものです。私の兄の河合雅雄がお猿の研究をしています。彼がよく言うのは「母の歴史というのは、人間の歴史を超えている」と。何千年かわからない。ところが父の歴史なんていうのは、ひよっとしたら一万年ぐらいかもわからない、という言い方をします。だから非常に歴史が浅い。歴史が浅いから弱いかというところこそが不思議なんです、新しく出てきた強さをもっているというのが「父性」なんです。母性は、ずっと綿々と在る強さをもっている、そういう不思議なところがあります。

今も言いましたように、お母さんが子どもを産むということ、これによってずっと続いていくわけですから。おそらくずっと昔は母というものの偉大さがわかっていたから、非常にたくさんのカルチャーのなかで神様は母親と結びついていたと思います。それが、みなさんよくご存じだと思いますが、地母神ですね。地なる母の神。日本の場合ももちろんあります。

すし、土偶がありますね。それから他の国に行っても、これはもうずっと昔からあるわけですね。

父なる神の登場と自然科学の発達

ところが父なる神、しかも強力なる父なる神というのがこれが突然出てくるんですね。それがユダヤ、キリスト教です。唯一の神が出てくる宗教が、砂漠に出現したというのが私はやっぱり凄くと思います。みなさん嘘だと思ふのなら、いっぺん砂漠へ行かれたらわかります。やっぱり日本みたいな風土では、父なる神は出てこないと思います。昔は人口が少なかったし、そんなに苦労しなくても食べるものがあるという文化のなかだったから、要するに自然に包まれてそこそこあまり無理をしなかつたら生きていけるという所と、砂漠で人間がよほど意志の力をもって、しつかりして物事をコントロールしていかないと死んでしまおうという所との違いです。

これはよく引用するんですが、以前京都大学の人文科学研究所の教授をしておられ、今は大谷大学に移られた谷泰さんという方がおられます。その谷泰さんの書かれた『聖書』世界の構成論理』という本が岩波書店から出ていまして、すごく好きな本なんです。それを見るとどういことがわかるかという、砂漠の遊牧民にとっては、自然を自分が絶対コントロールして生きていかなかったら死んでしまおう。その場合自然というのは羊なんです。羊を思いのままに放して、羊が勝手なことをしていなくなったら人間は追いかけている

だけで死んでしまっただけですから。人間は羊を絶対に自分がコントロールしなくちゃならない。

だから言うならば、「自然というものは人間がコントロールしなさいだめだぞ」という所に生まれてきているのと、日本人みたいに「自然と仲よくしていたらいいぞ」と、「ただし自然を下手に壊すと死んでしまっぞ」と思っ生きているカルチャーではすごく違うということです。だから砂漠へ行つてあの辺をうるちよろしているだけでも、何か天から唯一の神がしっかりと見ておられて、それに従つて自然をコントロールするというふうな考えが出てくるのは当然だと思えますね。そういうユダヤ、キリスト教というものがあつて、不思議なことにそのユダヤ、キリスト教がヨーロッパに入つていくわけですね。

ところがヨーロッパはもともと地母神のカルチャーです。キリスト教というのはやっぱり唯一の神がすごく強いものですから、今まであつたカルチャーを完全に根こそぎにしてしまつて、もうほとんど前の痕跡を残さずに一神教の文化を作つていくわけですね。この頃はだんだんわかつてきて、昔のものを掘り返していくと、ヨーロッパでも地母神の人形が出てきたり、もともと別のカルチャーがあつたということがわかつています。

そういう自然の豊かな所へ、自然をコントロールして生きるというユダヤ、キリスト教が入つていって、神の力というのはすごく強かつたんですが、その神の力に対抗して人間が何とかしようとし始めた。しかし、初めのうちは神様がお創

りになつた世界だから、絶対うまくできているに違いない、だから何とかして研究すると神様のことがわかるんじゃないか、という考え方で自然科学が生まれてくるわけです。自然科学で色々なことを発見して、「やっぱり神様は素晴らしい」と。ニュートンなんか完全にそうですね。

ニュートンなんかはそういう考え方でやっていたわけですが、その自然科学がどんどん進んできて、しかも科学技術までどんどん進んでくると、あまり神様に頼らなくても人間がやった方がいいんじゃないかと。例えばその証拠にペストなんていうような恐ろしい病気がありますね。そうすると神様にお願ひするということから護符をもらつてきたり、そこらに貼つてみたりとかいろいろやつても、あまり効果はないですね。ところが近代医学の研究でペストは、もう完全にほとんど撲滅されたといつていくらいじゃないでしょうか。つまり神様に頼らなくても、人間の理性に頼るといふことはすこいことなんだと。そしてついにご存じのように人間は月まで行くようになったんですからね。私たちは拜んでいたんですけど、うつかりしたらアメリカの人を拜んでいるんじゃないかと思つて（笑）。知らん間にあつちへ飛べますよということ、ウサギを拜んでるつもりだったのに、アメリカの人を拜んだりするようになってくるというのは、神様よりも人間の方が強いんじゃないかということがいろいろなところ出てきますね。だから今、人間の力にみんな信頼感をもつてきて、その人間の力の非常にわかりやすいものが科学技術ですね。これはもうすこいものです。これからどこまでどうなつ

ていくかちょっとわからないと思います。生命科学にしる、原子力エネルギーにしる、宇宙開発にしる、どこまでいくかわからない。そこまでどんどん進んできた。

こういうものが進んでくる背後に、やっぱりさつき父なる神という言い方をしましたが、どこかで父性というものはたらいっているわけですね。母なる神といいますが、自然に産んでいったらずっと続くじゃないか、という気持ちでいたところを、いやいやそんなことをするよりももっといろいろ考えを洗練して、そしているんなものを作ってどんどんやればいいじゃないかと、いう方がだんだん強くなってきたと思うんです。

そしてもう一つ面白いのは人間の歴史をみますと、やっぱり軍隊が出てくると、だいたい男が威張りだすという傾向がありますね。だから日本の社会なんかおそらく母系制だったと思うんですね。

実は最近、私はアメリカ先住民の所へよく訪ねて行ってるんですが、最近ナバホの人たちを訪ねて行きましたら、ナバホは今でもやっぱり母系制ですね。訪ねて行って家へ入ると、「お客が来た」というんで家族がずっと並んでるんですが、中心にびったり座っている人は女の人です。なかなか威厳があつてすばらしいおばあさんが座っておられて、その娘たちらしいといつても、もうみんな子どもがあるような人ですが、そういう人がいて男はなんか周囲でうろろろしてるような感じですよ。見事なものだなあとと思いますが、日本だって昔はそうだっただろうと思えます。

そういうところへ軍隊が入ってくる、それから政治が関係するということになってくると、だんだん男が力をもってくるわけで、そういうなかでしかもヨーロッパという国は、神様が父なる神でしたから、父性というものが強くなつてきて、そして今の世界の特徴は、ヨーロッパの文化が世界中を席捲していると言つていいくらいですね。もう世界中がヨーロッパ文化になびいてしまっている。我々がそうです。今の建物から服から、全部これヨーロッパ流。つまりヨーロッパの店のアメリカを含めて欧米流に変わっていつて、これは世界中がそうだといつていいと思います。そういう傾向がだんだん強くなってきて、そちらの方から物事を見だしますと、母性というものはどこかにやっかいな感じがしてくるんですね。

現代女性が母性を生きることの難しさ

どうやっかいな感じがするかといつと、みなさん女性の方が多い子どもを産んだ方はわかると思いますが、子どもを産むということは、パツと一つの生命が誕生してその生命は絶対的にお母さんに依存してくるということなんです。もうちょっとしっかりしなさい」と言つたつて、赤ちゃんはワッツとお母さんを頼りにしてくるわけですから。考えたら大変な話です。それこそ母乳を与えて、大きくして、とこう育てていくんですが、その時に子どもを育てている女性の方が、「一体私は何をしてるんだらう」とか、「何をするために生まれてきたんだらう」とか、「私の役割は何だらう」というよう

なことを思いかけて、しかも科学とか技術とかを使ってですよ、「パリへ行ってきた」とか、「月へ行ってきた」とか、そういうふうな考え方をしだすと、何かすごいやつかいな奴を背負い込んだという感じがしなくてもないですね。このやつかいな奴さえいなかったら、今頃は映画館に行っているとか、今頃は月へ行ってるとか言いたいのにな（笑）。その一つの存在これはまたすごい存在です。育てておられるみなさんはわかると思っていますが、赤ちゃんからして本当に立派なものです。ちょっとこちらがさぼると「ワーツ」と泣くしね。私も自分の子どもを育ててきたけども、やっぱり泣かれたら負けですね。「シーツ」と言ったら泣くし、何か音楽でも鳴らしたら泣きやむかと思っただって、なんば鳴らしても泣きやまないし、要はこっちが泣きたくなるくらいのことでは負けてしまふ。それはなぜかという、ものすごく大事なことは、一個の生命をもった存在だということですね。マイクホンだったらもう腹立ったらバーンと投げつけたってかまわない。ちよつと後で後悔しますけども（笑）。ところが生命をもっていることは、向こうが主体をもっているという、これはすごいことなんです。

ところが、先ほど司会の方のお話にもありましたが、子どもの虐待ということが日本で増えてきました。日本で増えてきたと言ってますけれども、アメリカに比べると全く問題外です。アメリカの虐待はもっとすごいです。ものすごく多いです。私はアメリカへ行くこともちよいちょいありますので、アメリカで虐待された子どもたちのケースですね、どうやっ

て普通に適応できる子どもさんにするかというような心理療法のケースをよく聞かせてもらっていますが、本当にすさまじいものがあります。

それを聞いていて思うのは、私たち現代人は何でも便利になつて、何でもだいたいの金を出して上手にやれば思い通りにいくという、つまり機械を使えばよいという、そういう考え方が身につきすぎているから、子どもも金を出して思い通りにやろうとしてしまふ、それでうまくいかないからムカムカと腹が立つてくる。そうするとさっき言いました、「こんなものバーンとやってまえ」という、そういう気が起こるのも当然でないかなあという気がします。

実際また、子どもを育てられた方はわかると思いますが、本当に子どもというのはこっちがムカムカするようなことを上手にやりますね（笑）。別に寝なくてもいい時はガーッと寝てますしね。それから大事なお客さんが来て、寝てくれたらいい時に、寝かそうとすればするほどパチーツと目を開けて見ると、それから大事なお客さんが来たときほど変なことをしますよね。「いやー、賢い子なんですけど」とかなんとかわざわざ言わないといけない。というのは、大事なお客さんが来ると親が緊張するから、親の緊張が完全に子どもに移っているから、子どもはばかなことするわけですが、そこまで考えられないからどうしても腹が立つてくる。生命ある存在というものが傍にいと、親の方も生命ある存在ですから、そこに非常に不思議な競合関係が生まれてきて、腹が立つといつても本当にムカムカ腹が立つてくるわけですね。単なる腹

立ちよりも大きいと思います。そうするとそれをコントロールできないと子どもをつい虐待してしまう、というようなことが今起こってきているのではないか。これはつまりなぜかという、現代人は物事を自分の好きなようにどんどんコントロールできるということを、やってやってやり過ぎて、そしてそれを自分の子どもにまでやろうとしてもこれはいかない、ということが起こってきているのではないかと思うんですね。

話がちょっと先へ進み過ぎたんですが、もういつべんまとめて言いますと、子どもを産んで育てるといったら何でもないうちに思うけれども、もう少し自分のやりたいことをしたいとか、あるいは操作をすればいろんなことができる、本当にその気にさえなれば、明日でもパリへ行けるっていったら行ける、というような観点から見ると、やっぱり子どもを育てるといっことは大変なやつかいな仕事だということになりません。そうすると、その時に母性ということはどう考えるのか、なんていうことが出て来ざるを得ない。それからもうひとつ、子どもを育てるのには、子どものことに本当に埋没してその子どもを育てるというか、さっき「やつかい」と言いましたが、もちろんすこい「嬉しい」ほうもありますね。いらないって思う、そっこのほうにずっと埋没していくと、自分というものがどこかで消えていくような感じがする。何か自分というよりも、「お母さん」という偉大なやつにならされてしまつて、それにパーツと引つ張つていかれて「私」が消えるような、そういう感じを味わう人もおられるんじゃない

かと思います。

これはこの頃だいぶ変わってきましたが、今から十年前くらいだったらよくありました。小学校の子に、「母の日」にあなたのお母さんを描きなさい、「父の日」はあなたの父を描きなさい、というように絵を描かせる。すると、お母さんの絵はみんなよく似てくるんですね。非常に典型的なんです。要するにお母さんというのは、子どもにお乳を飲ませてとか、料理を作るとか、子どものために何かしているというかつこうなんです。お父さんという働いているやつもいるし、ごろ寝してるやつもいるし、服装までいろいろですね。ステテコのやつもいるし、背広着たやつもいるし。だから小学校の先生がよく言われましたが、お父さんの絵を描かせるといういろ出てきて面白い。ところがお母さんという絵まで一緒になる。そして作文もなんとなく一緒になるんですね。母の日といったら「お母さんありがとう」とか言つて。みんな「私のためになにになにして下さつて…」といううなやつばかり出てくるわけです。お父さんはあまりみんな、ありがたいは思つてないんだけど、面白いやつやな、とは思つているわけですね（笑）。

そういうことからすると、現代の女性の方が「私もいつちよ面白いことをやるつ」とか「私は一体何をやるんだらつ」というような観点にぶつと立つと、「お母さん」というやつにうっかりなつたら大変なことになると、人格が喪失していつてそのうち神様めがねになるんじゃないかと（笑）、そういう恐れを感じられるのではないかと私は思います。私は男性で母親で

はないんですけれども、推察して言うとその感じがします。そしてまた「お母さん」ということのなかに、スーツと入っていた時に、そこで行ゆる学問的なこととかいわゆる経済的なこととか、ちゃんと考えるということがすごく難しいだろうと私は思います。それほど子どもを育てるというのはすごいものだと思います。自分の人格を捨てざるべからぬ感じをもつていかなかったなら、母性というものは出てこないほどじゃないかと私は思っているんです。

簡単に歴史を言いますと、まず母性がすごく強い時代がこれは一万年か、もつと続いていたんですが、そのうちに人間が「文字」を発明する。だいたい文字を発明したというあたりからが怪しいと思うんですが、その頃からだんだん男が力をもつてくる。そのなかで特にキリスト教文化圏 実は本当はイスラムのことも考えねばなりません、私はもう一つわかりません。ただわかっていますのは、イスラムは一神教ですけれども、神の力がすごい強い。まだやっぱり「神の御旨のままに」という姿勢がすごく強いので、キリスト教文化圏ほど「人間」が強くなって出てきていないんじゃないかと、私は思っています。もうちょっと言うておくと、イスラムの方は唯一の神と人間ですよ。ところがキリスト教文化圏は神について、「人間だけどキリスト」というイメージをもつてますから、つまり「神にして人」と言っているようなイメージが出てきますから、あのイメージをもつということとは人間が力をもつことにすごく意味をもつたのではないかと、思っていますけれども。

包み込む母性、切断する父性

そういうわけで、長い母の歴史のなかに急に父が出てきて、しかもそれがどんどん強くなってくる。今、母性と父性というのをあまり定義せずに、非常にいいかげんな言い方をしていますが、私の考えでは母性というのは全体を包み込むという力が非常に強い。全体を包んでしまふ。父性というのは区別を明らかにする、切断するという力が非常に強いと思っています。

簡単な言い方をすると、母性というのは「うちの子、私の子はみんな良い子なんや」という、これが母性の考え方。父性の考え方というのは、「良い子だけがうちの子だ」これが父性の考え方です。「悪いやつは殺せ」というのがお父さんの考え方ですね。お母さんの考え方は「私の子はみんな良い子。よそのやつは殺せ」という考え方なんです。よその子は知らんで」というような。そうでしょう。みんなそういう気になったことありませんか。「よその子は勉強せん方がええのになあ」というようなことを、これは言えないけど、ちよくちよく思ったりして（笑）。その包まれたなかで「絶対」ということがある。ただしこの包みが大きくなっていくわけですけども。それに対して父性というのは、どんどん分けていく力がありますから、自然現象をただポーツと見ているんじゃないかと、そのなかにどう分類したらいいか、どう分けたいか、分子とか原子とかそこまで分けて考えていくわけですが、そういう父性の強い時代が続いて二一世紀になるわけですが、私の考えではそろそろ二一世紀ぐらいから、私が今言ってい

るような父性も母性も両方大事というか、母性中心、父性中心という考え方が変わろうとしてきつつあるのではないかと、いっふうに考えています。

そしてもっと言うと、よくよく調べてみると、あるいは自分の生き方というのを考えてみると、男も女も父性と母性を相当もっているんじゃないかと私は思っています。男性でも相当な母性をもっているし、女性の方も相当な父性をもっておられる。ただ後でも言いますが、ここに身体、からだというものが入ってくるとこれはなかなかうまくいきません。だから身体性のレベルになりますと、ちょっと違うことを言いますが、そこまでいかに、先ほど言いましたように、物を切断して考える考え方が、物事をなんとかひっくるめて一緒にやっていこうという考え方が、そういうふうな言い方をする限り、男性も女性も相当程度に父性も母性ももっている。そして人によってやっぱり母性の強い方と、父性の強い方とどうしてもあるということが言えると思います。そういう時に、女性であるけれども父性が強い人というのがおられてもおかしくないし、男性だけでも母性の強い人というのがおられてもおかしくないというように私は思っています。だから自分はこの辺の人間で、この際どういっふうに生きていくかというのを一っつ考えねばならなくなったので、今は難しくもなかったし面白くもなかったと思います。

昔は、私が子ども頃は、女の人は母性でなければいけないかったですね。「女の人＝母性」ということになって他のことはできない。子どもを育てて子どものためにからだをすりへ

らして、あるいは心もすりへらしてやるのがお母さんと決められていたわけですね、ちょっと前までは。そういうのは私は相当変えるべきだと思っています。変えて、私は女性だけでも父性の強い人間だからそちらの方で生きようかとか。それから、女性の方で父性が強くなって父性を磨いて相当成功してきたけども、三五、六歳になって急に母性というのはすばらしいと思出した、なんていう人もあるんですね。アメリカで三五、六歳どころか、四〇になってから子どもが産みたくなってくるといった問題がこの頃起こっています。だからアメリカでは高齢者出産の本というのがたくさん出ています。私の知っている例でも、四〇ぐらいで子どもを産む女性がだいたいおられますね。要するにそういう方は、ものすごいキャリアがあって、男に絶対負けないというか勝ちますから、がんばって弁護士になったり、あるいは会社の社長になったりしてバーツとやってきて、お金も儲かる地位もある、で最後にあまり面白くないなあということがわかるんですね。これはやらないとわからないんですね、人間というのは。大学の教授なんていうのもそうですが、ならない場合はよさそうに思うんですけどもやっぱりあまり面白くないですね(笑)。やろうと思えば、女の人ではできると思います。やっているうちにどうも面白くないと。よく考えているうちにものすごい面白い世界を忘れてた。それは、子どもを産んで育てることだ。そこがアメリカ人ですね、四〇になってからやろうというわけです。またこれは、この頃相当可能になりました。

「私」はどう生きるのか

これからはそういうふうになってくるかもわかりませんがね。自分は、人生のどのへんはどっちを優位に生きていって、どうするかというふうな。しかし、アメリカに比べると日本はまだまだ自由に生きにくい国です。アメリカ人はその辺は羨ましいですね。逆の方もおられますよ。ずっと子育てしてきて五〇くらいになってから「よし、大学院へ行こう」といって、大学院に来ておられる女の人のというのはありますよね。それでちゃんと博士になってまた教授やったり。つまり人間って、自分のやってないことをやったりやってみたくてすからね。それが可能な社会というのは素晴らしいんじゃないかと思ってるんですが、日本もなんとかそうやってほしいなあという気持ちが強いです。幸いにもこの頃大学院には、門戸が開放されてきましたので、日本でもだいたい年齢の方が入って来られるようになりましたね。このなかにもおられるかもわかりません。私が京都大学にいた時は、六〇歳の大学院生の方もおられましたから。私も今からでも入りたくらいですが、ちょっと学力がないので入れませんけどね（笑）。本当にもういっぺん数学でもやったら面白いだろうと思うんですが。この間そういう話をしまして、私は理学部数学科出身なんですよ。だからもういっぺん数学をやって、ユング心理学と数学と結合して新しい本を書きたい。「どんな本ですか？」ときかれるから、「零（霊）の発見です」と言ってますですよ（笑）。

いろいろ変わる社会にしよう、というのには私は大賛成で

す。その時にものすごく大事なことは、父性と母性であったとしてもどちらかが価値的に上だという考えをもう捨てていこう、ということですね。女の人は母性、これは価値がある、女の人が母性以外のことをやったらこれは駄目、というのが昔の時代ですね。また、父性的なことをやっている人は価値が高いけれども、母性的なことをやっているのは価値が低いという考え方がしばらくありましたが、これもおかしいと思っています。「私」は一体どういうふうになるんだろう。自分の人生設計ができて、相当自由にやれるというのが現代ではないか。そのときに母性ということをもういっぺん今言ったように考え直していただきたい。

そしてここで言いたいのは、さっきから言ってますように、まず母性優位の社会がずっと続いてそこから父性が入ってきた。その頂点が私は二〇世紀じゃないかと思ってるんですが、二〇世紀は特に、「私はどこそまで行きました」、「私はバリまで行きました」、それも「パリまで一二時間で行きました」とか、何か遠い所へ速く行くやつほど偉いようなそういう錯覚がおこる。例えば仕事していても、「あなたは年商いくらですか」とか、「年収いくらですか」とか、たくさん儲けたりたくさん月給をもらっている人が偉いような錯覚を起こす。これみんな父性的な考え方ですね。全部計量して計って上のものは上、下のものは下という考え方は。これはもうほとんど強くなって、今でもアメリカへ行くところというのはすごく強い感じがします。

日本はアメリカなどに比べると、まだまだ母性的なものが

強い社会だと私は思っています。アメリカの競争原理の厳しさというのは、日本人は向こうに行かないとわからないと思いますね。金の儲かる人はどんどん儲かる。能力のある人はどんどん上がっていくし、ない人はどんどん下がっていくと思いますか。そういうのが非常に強い。だから今、アメリカでは、上位の一〇%の人がアメリカの財産のほとんどを占めているくらいじゃないですかね。他はみんな少しづつ分け合っていて、金持ちというのは大金持ちができてしまう、という国です。

アメリカの人と会って話を聞いていると、「私はこれができます」「これとこれができるんです」ということをパツと言つ。それが言えて相手と比べて勝つ、という人間にならないと駄目だ、というような非常に厳しいところがありますね。これを日本人は時々間違つて、負けんところと思つて嘘つく人がいるんですが(笑)、これは絶対駄目ですね。嘘はつかない。嘘はつかなくて、そのとおりちゃんとやつて戦つと云いますか。

私が思っているのは、グローバル化の時代ですから、そういう国ともつきあわねばならないので、そういう国に負けるのは残念だと。だからアメリカ人とつきあおうがヨーロッパの人とつきあおうが、ちゃんとできる人間に私たちが日本人はならねばならないと思つています。日本人は実はこれから父性を身につけることを、もっともつと努力していいんじゃないかと私は思つております。アメリカ人たちは本当はもっと母性というものを身につけてほしいと思つていて、

そういう動きは両方あるような気がします。そしてもっと父性も母性もつた人間を育てるようになっていくんじゃないかと思ひますが。

母性と「個」の相克

日本で、父性をもつとみんなが身につけることが大事だと言いますが、ここで問題が起こるのは、父性を身につけるということは母性を捨てることだと思ふ人がいるんですね。それをやると大失敗をしてしまう。だから、父性を身につけるけれども母性ももつていなくちゃならないことを、ちゃんとやつておかないと、人間というのはどうも考え方が単純ですから、日本人がアメリカに負けないようにやつていくとしたら、母性は捨てようと思ふ人がいるんですが、せっかくもつているものを私は絶対捨てる必要はないと思つています。ただし、両方要るなんて言っていますけれど、本当は二つ生きるということとは、すごい難しいことですからね。本当に難しいことです。

今の日本の状態はどうなっているかという点、母性が「個」というものをワーツとつぶしてくる、「お母ちゃん」というものの力が、自分の個性を潰すような感じが強いんで、何とかそれに対抗しようとする、母性をみんな否定したくなるということですね。だから、その否定したくなるということが強くなると、虐待も起こってくるし、それからいろいろ子どもの問題も起こってくる。そこでまた「母性の復興」とすぐく言う人もいますが、そればかりも言えない。私たちの

難しいところは、父性と母性と両方もたねばならないところではないかと私は思っています。

そういう時に、もう一つの大きい問題は、からだ、身体といることがあるんですね。そもそも二〇世紀というのは、人間がいろんなこと、自然科学を勉強し技術を勉強し、月まで行ったりするようになっていくと、頭で考えたことがどんどんできるから、だんだん人間が本当に考え行動する時に自分の身体、からだというものから切れていくということが起こっているように思います。それがまだ現代の非常に大きい問題だと思えます。

極端なことを言うとき、心身症というような大変な病気がたくさんありますが、これはやっぱり現代人が自分の身体というものからどこか離れていつて、そういうことから出てきているんじゃないかと思うくらいです。自分は土から出てきて、土に還るんだという、足が地についている生き方を忘れてしまつて、インターネットでパッパツとやればパツと儲かるという、確かにそうですからね。すごく儲かったというのはこれも素晴らしいことですけど、それだけやつてると自分が生身の人間だということを忘れてしまふんじゃないか。だからもういつべん、からだと結びついた人生、からだと結びついた自分の生き方ということを考え始めると、やっぱり男性と女性とは違うわけですね。これはイコールにはなりがたい。そしてそういう意味の母性というものは、女性のからだとすごく結びついていきますから、それを女の方がちゃんと生きると思いますか、自分のものとして生きると。そして自分

のものとしてそれを生き出すと、同じことを言つてますが、やっぱり自分の「個」というものがどこかで消えていくような感じがある。怖いようなね。これは男でもそうだと思いますよ。男でも、自分とからだとひつついて、みんなと一緒に生きていくというふうに行き出すと、自分の「個」というものがどこか消えていくような感じがあるんじゃないか。これはある意味でいうと、日本の男性たちが今やっていることだと言つてもいいぐらいなんですけどね。みんな会社のためにとか、何とかのためにと言つてだんだん自分がなくなつていく。

「個」を無くすという個性

ここで私が今考えているのは、母性に対して、下手したら消えるといっている「個」というのは、やっぱり西欧の近代から出てきた「個人」というアイデアではないか。ここで個性ということをもっと広くとると、自分というのを全く捨てて我が子のために一生を生きた人、なんていうのはすごい個性的といえるわけですよ。そういう生き方を生きているわけですから。最近そんな人は滅多にいませんからね。もしおられたら非常に個性的といつていいと思うんだけど。つまりもういつべん私たちには個性ということを広くとつて、私はあの人と違うとか、私はこれをしましたとか、私はこれだけのことをしたんです、というふうに見える個性はわかりやすいけども、そうじゃなくて「私」という人間は私というものを全く無くして生きる人生を生きただけです、なんていうのもこ

これは個性に入れていいんじゃないかとこの頃思っているんです。だから私の生き方のなかで、ある時点は確かに「私はこれをしました」ということもやっているけど、ある時点は確かにそんなことはもういいんじゃないかと、要するにみんなと一緒にこの人のためにとかあのためにといいので、私のいわゆる「個」なんていうのは無くなったというふうな体験をする、あるいはした、ということとは広い意味の私の個性に、すごく意味をもってるんじゃないかということはこの頃考えています。つまり、父性も母性も両方要するというふうな言い方をしているのは、そういうことなんです。もうヨーロッパ近代の個性というやつを、私たちは超えることを考えるべきでないかと、自分の個性というものはもっと広く考えた方がいいんじゃないかと。

ヨーロッパ近代の個性というのはわかりやすいですね。個人、私がいてそれはあなたじゃない、他の人でもない。私はこれをしました。わかりやすいけどそんなこと言ったら死んでからどうなるの、と考え出すと、ヨーロッパの個性はちゃんとキリスト教にバックアップされてますから、あと最後の審判を待って、最後の審判で良かったら天国へ行くことになってますから、死んでからのことも保証されているんですけれども。私たちはキリスト教じゃありませんから、私はですよ、みなさんのなかにはおられるかもわかりませんが。そうすると、死んでからのことまで考えて私の個性なんて考え出すと、最後の審判というような長い間待っていられますし、待っててもなかったりしたらどうしようかしらなんて思っ

大変なことになってきますんで(笑)。自分が生きている間に自分の個性ということを考える場合に、唯一の神との関係で考える個人というものでない個人ということを考えてみると、ヨーロッパ流の個人主義というものはもうあんまり意味をもたないんじゃないかとの頃思っているんです。そういう自分の个性的な生き方というなりに、全くいわゆる「個」を無にするという生き方も含まれるんじゃないかと。そうやってくると、母性というものが今までの「女だからちゃんとお母さんらしくしなさい」という単純なことではなくて、男性にとっても全く同じように母性ということが深い意味をもつのでないか、そんなことを考えています。